

ボクは啞然としてしまった。

いつの間にか、美優のことを…いや、ミュキのことをモロに「ミュキ」と口にしてしまっていた…。

どうしよう…これじゃ言い訳もできない。

「ねえ、なんで知っているの!？」

ミュキは執拗に訊いてくる。

でも、なんて答えたらいいか…ダメだ…全然思い浮かばない…。

ミュキの顔すら見ることが出来ない…。

ミュキが口を開いた。

「アイ…アイがしゃべったんでしょ?…」

!

「やっぱり…」

ボクは何もいえない…ごめんアイちゃん…。

「ねえ、カスガはどこまで知ってるの?」

…どこまでって?

それは…ミュキが美優になっていたこと、そして記憶喪失になっていること…。

…あれ?

なんで、美優だったミュキが、自分のことを「ミュキ」だということを知っているんだろう?

なんだか訳が分からなくなってきた…

記憶喪失だったんじゃないのか?それとも…

「ね、ねえ…何で美優は、ミュキのことを知ってるの?」

ボクは訊いてみた。

ミュキはハッとした。

「ボクは確かにアイちゃんからおしえてもらったよ。美優がミュキだってこと。でもミュキが記憶喪失って…」

「そ、それは…」

ミュキは一言口にしたが、すぐに黙ってしまった。

ボクは続きを言いたくなったが、ミュキから話してもらいたくなっていた。

なにもかも。

ボクの知らないミュキを。

「…ゴメン、帰るね。」

なんとミュキは車を降りようとした。

ここは止めなければ!

「待てよ！ミュキなんだろ！？美優なのかよ！？ちゃんと説明してくれよ！なにがなんだかさっぱりわからないよ！」

ホントに頭の中が真っ白。

いろいろ疑問や聞きたいことが多すぎて、全然まとまらない。

ミュキは、クルマのドアを開けようとしていた手を、プルプル震わせて止まっていた。

そして、涙を流していたのか、雫が落ちている。

「…ゴメン、カスガ…少し待って…。」

泣きながらミュキは、ボクに懇願した。

そんなミュキの様子を見て、ボクも落ち着かなきゃ…と、少し反省したとともに、なんとか落ち着こうと頑張っていた。

…落ち着こう…落ち着かなきゃ…

…とにかくクルマを走らせようと思った。

「ちょっとクルマを走らせてもいい？」

ボクはミュキに優しく話しかけた。

ミュキはすすり泣きながら、無言で頷いた。

ボクはクルマを走らせた。

特に宛てはないけど、でも黙っているよりはいいと思った。

周りは既に暗くなっていたけれど、かえってその方が落ち着くかもしれない。

ボクは市街地から、河川敷の道へとクルマを走らせた。

この河川敷の道は、結構綺麗な夜景が見れるのと、静かな川の景色、雰囲気がとても良く、デートの時には良く走らせていた道だった。

まだ時間がそれほど遅くない時間だったため、まだ沢山のクルマが走ってはいたが、それなりのペースで走らせることが出来ていた。

ミュキは少し落ち着いたようで、目は赤いものの、泣き止んでいた。

そして横を見るわけでもなく、真正面をじっと見ていたように見えた。

ボクはもう少し時間が掛かる…かな…。

運転しているおかげで、あまり余計なことは考えてはいないけど、でもボクからミュキに話しかけることには抵抗がまだあった。

もう少しぐると回って、観光スポットの山へと向かおうか、そう考えていたときだった。

「…あのね、実はね…」

「え、あ、うん、何！？」

いきなり話しかけてきたミュキに、ボクはなぜか非常に焦った。

そう、覚悟しなきゃ…って思ったから。

「…怒らないで聞いてくれる？」

「うん、わかった。」

どうやら、話す覚悟ができたみたいだ。

ボクも覚悟しておかないと…

「実は、もうずっと前から記憶が戻っていたの。」

「…いつから？」

「それが…ホント怒らないで…カスガに初めて会う少し前からだったの。」

…！…

ホントに！？

じゃ、最初から…初めて会ったときから既に『美優』は『ミュキ』だった？

「私が事故で入院してて、しばらく昏睡状態だったらしいの。それで私が目を覚ましたときは、事故から5ヶ月ぐらい経っていて、そしてここ数年の記憶が無くて…。」

ボクは言いたいことがあったけど、でも話を最後まで聞いておくべきだと思って、何も言わなかった。

「それで私がとりあえず病院を退院することになって、両親が気分転換でもすれば記憶が戻るかもしれない、ということで、オーストラリアに行ってて…でもまだ記憶は戻らなくて…。」

ボクはじっくりと話を聞きたくなったため、近くにあった公園の傍にクルマを停めた。

そしてミュキの話は続く。

「長期間オーストラリアにいる予定だったみたいだけど、ほら、両親とも大学で働いているでしょ？大学の夏休みが終わっちゃうのもあって、2週間で日本に帰ってきたの。それで日本に戻ってきて家に帰ってくる途中に…」

あれ…いきなり話が途切れた…

「…どうした？」

ボクは黙ってしまったミュキに声を掛けた。

「あ、ゴメン…ちょっと考えちゃって…おかしいね、ゴメンね…」

「ねえ？1つ訊いてもいい？話しの途中で悪いけど。」

「なに？」

ミュキは緊張してこちらの様子を見ている。

「いや、ちょっと聞いていたことと違うことがあってさ…ミュキのお母さんには『海外でミュキの治療をすることにした。助からないかもしれないけど、もっといい環境で治療させることにしたいから』って言われてたんだ。でもミュキの話だと、聞いてたことと違うなって思ったんだけど…」

「え、お母さんそんなこと言ってたの？…お母さんどういふつもり…あ、ああ…そっか。」

え、なに？どういうこと？

「お母さん、私の記憶がなくなってたから、きっとそれまでの事はないものにしたかったんじゃないかなあ…ほら、そもそも私、昏睡状態だったし、長期入院もしてし…きっと私の面倒見ることだけしか考えられなかったんだと思う。」

…うん、あのお母さんならそうするかも。

じゃ、昨日部屋までやって来たのは何故？

「ちょっと話を続けていい？」…ミュキは訊いてきた。

…ちょっと腑に落ちないけど仕方が無い…

「いいよ…」

「ホントにゴメン…ワガママばかりで…」

「いや、いいからさ、話してよ。」

ボクはやさしくミュキに話した。

ボクのその様子を見てか、ミュキもちょっと笑って「ゴメンね」って言った。

そして話を続けた。

「家に帰る途中の駅の前で突然記憶が戻ってきたの。ホントになんの前ぶれも無く。」

なんと、かなり前どころか、昔付き合ってたとき、そのままやり直せるくらい前の話じゃないか。

なんでこんな…今頃になって…

「それで記憶が戻ったのは良いんだけど、さっきカスガが話してたじゃない。お母さんの話と私の話が違うって。私すごく衰弱していたのもあって、前向きにもなれなくて…私が諦めていたの…カスガのこと…。」

「え、なんで？」

ボクは思わず訊いてしまった。

「だって、すごい痩せちゃったし、目の下には隈もあったし、見た目的に自信がなくなってたのと…もう事故から半年近くも経ってたでしょ？それにカスガも病院には来なかったみたいだし、お母さんもなんだか違う風に説明しちゃってたみたいだし…。」

そうか…それでさっき話が止まったんだ…。

その当時のミュキの見た目はともかく、時間が経っていたことによる不安はあっただろう。

世の中では付き合ってた1週間で別れるカップルもいることだし、半年間顔も見せず、お母さんからの話しも無かったとなると、そう考えてしまってもしかたがない。

ましてや、体が弱っているところに、精神面でも不安定になっていて、すごく苦しい思いをしたと思う…。

ミュキは話を続けていた。

「でも私、あきらめちゃってたんだけど、ある時買い物に行くのに駅まで行ったら…あきらめていた気持ちがまた起こってきて…それでアイに相談したの。」

うへん…なんとなく、今後の展開がうっすらと判ってきたような…

でもちゃんと話を聞こう…変に早とちりする必要ないし。

焦って話をこじらせちゃ、かえって話が分からなくなっちゃう。

「それで…私も酷い見た目だったから、そこの改造から始めて、そしてバイトも始めて、そして一人暮らしも始めたの。ミユキとしてでなく美優として、いつかカスガに近づこうと思ったから。」

アイちゃん、その頃から…ってことは、昨日のアイちゃんの話は半分嘘だったということか…

いや、アイちゃんは昨日ミユキのことを話してくれたけど、ホントは違うことを言いたかった？

ミユキの話はさらに続く。

「お母さんはちゃんとカスガにその時の私のことを話したって言ってたけど…でもどうしてもやり直したかったから、どうにかカスガに近づきたかった。そこでアイちゃんに相談して、いろいろと考えた結果、とりあえず別の人間としてカスガに近づこうということになって…あ、あれ…ゴメン、なんだか話が訳分からなくなってるね…。」

「いや、いいよ…ちゃんと聞くから落ち着いて…」

ボクはやさしくミユキに話した。

「別の人間になるって言ったけど、ほら、昔の私ってそれほど美人じゃなかったから、この際生まれ変わりがかったのもあったの。もっとかわいく、もっと美人に、もっと魅力的な人間になりたいかった。でもあまり変りすぎたらカスガに逢えなくなるかもしれないし、逢えたとしてもうまく行かなかたら意味ないし…」

確かに…前のミユキに比べると全然美人だし、かわいいよ…見た目はよくなっている。

ミユキの話は続いた。

「それでアイちゃんからの情報で、カスガがファッション関係の情報集めているって聞いたの。だからブティックとか服飾屋さんで働けば、バツリと偶然に再会できるかも…って思って、それであの店に働いていたの。その思っていた通りカスガは何回かお店に来たけど、私には気づいてくれなかった…。」

…確かに。

少し気になった女の子ではあったけど、ミユキだとは思わなかった…。

ミユキの面影を追いかけてたわけじゃなくて、ミユキの見た世界を追いかけていて、数あるブティックやファンシーショップを回るなかの1つのお店でしかなかったし…当時は…。

「でも私のことは見てくれてたよね？知ってるんだよ。道路の向こう側から私を見ていたの。だから気づいてもらえなくてショックだったけど、でも諦めなかったの。そのことをアイに相談したら『じゃ、さりげなく合コン開いてみる？』っていう作戦を出してくれて…合コンってあまり得意じゃないんだけど、でもこのままカスガと離れるの嫌だったから、合コンに出ることになって…」

そうだったのか…あの美優と出会ったあの合コンは、アイちゃんが仕掛け人だったんだ…。

でも…

「でも、合コンなんてしなくても良かったみたい…その前に直接逢っちゃったもんね。カスガに。」

ホント、この話を聞いていると、合コンがきっかけで美優と付き合うことにはなったけど、もしかしたら合コンしなくても付き合ってたかも。

「あの時はホントに運命感じた。私にはカスガしかいないって。だから、合コンではがんばったんだ。カスガといっしょになりたかったから。からかわれても、逆にカスガに嫌われそうになっても、意地でも付き合うつもりでいたから、かなりがんばったんだよ。」

そうよね…がんばってたよね…妙にフェロモン感じたもん、あの時。良く憶えてるよ…。

ボクを楽しませようとしてたし、ファッションの話とかもいっぱいしたっけ…。

でも話を聞けば聞くほど、妙に矛盾を感じてしまっていた。

さらにミュキの話は続く。

「でも…私が『美優』として、カスガと付き合い行っているうちに、なんだかしっくりこなくなって…それで最近またアイに相談したんだけど…アイ、カスガに話してくれたみたいだね。」

ミュキはそういうと、うつむいてしまった。

「ミュキはどうしたかったの？その…美優のまま行きたかった？」

「うん、いつかは私が『ミュキ』だってことは、いつかは話すつもりでいたから…ちょっと予定より早かったというか…でも、そのことで悩んでたし…ゴメンね、びっくりさせて。」

そうか…アイちゃんは自分の考えでボクに話したんだ…。

あ！そういうば…

「ねえ？昨日の夜、ミュキのお母さんがボクの部屋に来ただけど…」

「あ、ああ！あれ、勘違いしたのよ、お母さん。道路の挟んで向こう側でカスガを見かけたらしいんだけど、その時に女の子と二人で歩いてたんだって。それでお母さんは私とカスガが付き合っているってわかってから、そのとき一緒にいた女の子が私じゃなくて違う女の子だった思ったのよ。…お母さんには私が『美優』になっていること知らなかったし…。」

「え！？説明してなかったの！？」

「うん、それで昨日たまたまお母さんを見かけて、それで行く方向が同じだと思ったら、お母さんカスガの部屋に行こうとしているのがわかって、それですぐに連れ戻して…ちょっと時間が掛かったけど納得させたよ。」

「お母さんはずっと日本に？一緒に帰ってきたの？」

「うん、お父さんはオーストラリアに行ったままだけど、お母さんと私だけで日本に帰ってきたの。」

「もしかして、一緒に暮らしてるの？」

「違うよ。私はあそこのアパートで一人暮らしてるもん。お母さんは前住んでいた家のままだよ。」

う〜ん…なんだかこれまでのことが分かったというか、余計にわからなくなったというか…

ちょっと整理してみようか…。

まず、『美優』イコール『ミュキ』っていうのは分かった。

あと、記憶喪失ではあったけど、ボクと出逢った時には既に記憶は戻っていた。

ボクと美優が付き合うことになったのは、アイちゃんとミュキの策略であった。

ミュキのお母さんは、二人が交際していることを知ってはいたが、勘違いもしていたということ。

…こんなところだろうか？

でも、『美優』が『ミュキ』だって言うのはわかったけど、でも今後どうしたらいいんだろう…

ボクはこれまで『美優』として付き合ってきたわけだし…

実際はミュキなんだけど…

…ミュキってどんな子なんだろう…

考えているうちに、どんどん訳が分からなくなってしまった。

美優と付き合っていたのに、美優がミュキ…

ボクが今好きで付き合っているのは美優、前の彼女であり、そして今でも心の中にはミュキ…。

…なんだか自信がなくなってきた。

どうやってこれから付き合っていけばいいのか…これまでのやってきたことや、思い出…全部一緒？

どんどん混乱してきた。

とりあえず、今日のことは今日のことで整理したい。

ミュキに訊いてみた。

「ねえ、今日は美優なの？ミュキなの？」

「私は美優だし、でもホントはミュキで…」

「そうじゃなくて。美優がミュキだってこと、ボクが知らなかったら、ミュキが今こうやって話してくれなかったとしたら、今日は美優として逢っていたはずだし…それに、急に…っていうか、昨日アイちゃんから聞いてはいたけど…でも実際こうやって逢って、そしてこんな話をしちゃって…これからどうしたらいいか…」

ボクは少し泣きかけながら、ミュキに話した。

「…ゴメン…でも私も、さっきカスガと逢ったときに、『ミュキ』…なんて言われたから…結局いつかは話すことなんだしって思って…かえって訳分からなくしちゃった…」

ミュキはそういうと、クルマのドアを開けて、ゆっくりとクルマの外に出た。

ボクも倅って、クルマの外に出た。

さすがに少しずつ秋の雰囲気になってきているせいか、肌寒い秋風がボク達をなでていった。

まだ夏の雰囲気を出している服装のミュキは、少し寒そうだった。

ボクはクルマの中においてあったジャケットを出して、ミュキに差し出した。

「寒いよ、風邪引くよ。」

ボクはやさしく話しかけた。

「うん、大丈夫…大丈夫だから…」

ミュキは川の方を見たまま、か細い声でボクに言った。

…ミュキが泣いている…。

どうしたらいいんだろう…ボクとミュキと美優と…きっと色んなことが重なっているから、どうにもなんて話していいかわからない。

でもとにかく、ミュキは寒そうだ。

身震いしているのが見て分かる。

せめて、外気の寒さからは、守ってあげたかった。

ボクは声もかけず、ミュキに後ろからジャケットをかけてあげた。

それからしばらく、二人して川を眺めていた。

しずかな夜の川に、クルマのエンジン音だけが響いている。

なんだかそのエンジン音もわずらわしく感じてきたので、ボクはクルマのエンジンを止めようと、ドアに手をかけた。

ドアを開けたとき、後ろからミュキがボクに抱きついてきた。

「ダメ！もう私を置いていかないで！」

ボクの背中に体を預けたまま、ミュキはボクにそう訴えた。

ボクは「置いていかないよ」と言おうとしたが、ミュキはその前に…

「私だけ見て！」

ミュキはボクの背中で、しゃっくりを上げながら、静かに泣いている。

そのままの状態、10分ぐらいいは経ったであろうか？

今では静かに、ミュキはボクの背中にくっついてきた。

ちょっと寒い夜なのに、密着しているからか、それとも落ち着いてきたからか、それほど寒く感じなくなっていた。

そこでミュキが口を開いた。

「ねえ…カスガ…今でも私のこと好き？」

「…うん。」

それからまたミュキは黙ってしまった。

少し経ってから、今までくっついてきたミュキが、ボクから離れた。

ボクはすぐに振り向いた。

ミュキもボクのほうに振り返り、そしてこう言った。

「ねえ…また前みたいにやっっていけるかな？」



…ボクにとっては、とてもおもしろい問題だった。

これまでボクが『美優』として付き合っていたその人が、実は『ミュキ』だったのだから。

『ミュキ』も『美優』も、どちらも同じくらい好きだから…

それを急に答えないといけないなんて…とても無理だ…。

「ミュキ…ミュキはミュキなんだよね？…これまでの美優に対して…ボクどうしたらいいかわからないよ…。」

「なんで？美優も私なんだよ！？記憶だって…美優だったときの記憶だって、ちゃんと分かるんだよ。とくに記憶が戻ってるんだから。」

「いや、言ってることは分かるんだ…でも、なんだか割り切れないと言うか…たとえミュキが演じてたとしても…」

ボクは言葉を詰まらせた。

そう、確かに美優はミュキだったわけで、しかもそれはボクに近づくための演技だった…。

ミュキが声を掛けてきている。

「…ごめんね…難しい状況にしちゃって…やっぱり私…カスガと別れたほうがいいのかな…」

え、ミュキ！？今なんて言った？

「ミュキ、どうして…本気で言ってるの？」

「だって、じゃ、なんでさっきの質問にちゃんと答えてくれなかったの！？もしかして『ミュキ』じゃなくて『美優』の方がよかったの！？」

…ダメだ…とても即答できない…

ミュキも好きだけど、美優も好きだった…。

「ね、だから、一旦別れてみようよ…私、ずっとカスガのこと好きだよ。これからも…好きだよ…。」

ミュキは目に涙を浮かべながら、ほとんど聞きたくないことを言い出した。

それは嫌だった…とにかく嫌だ…でも…それが言葉にできない…。

「…ゴメン、ミュキ。…でも別れるのは嫌だよ…。なんて言ってもいいかわからないけど嫌だよ…。」

ボクも目に涙を溜めながら、ミュキに訴えた。

「…ゴメン…私、さっきからずっと考えてたの…私もカスガと別れるのはイヤ。…だけど私…やっぱりカスガを騙してたし、今もこうやってカスガを困らせて…だから…」

「だからって何！？好きだったら別れなくてもいいじゃん！なんでだよ！」

ボクはつい興奮してしまった。

そしてミュキは泣きながらこう言った。

「じゃあどうしたらいいの！？カスガはどうしたいの！？私は…私は…私はカスガと一緒にいたいよ！！」

そういうと、ミュキは大声で泣き出してしまった。

ボクはそんなミュキを見て、すごく後悔をした。

気持ちをはっきりと表現できていれば…

ボクは思わずミュキを抱きしめた。

するとミュキは、抱きしめたボクの手を解いて、ボクから少し離れてしまった。

向こうを向いて、すすり泣きしている。

ボクはどうしたらいいんだろう…ミュキの後姿を見ながら、ボクは同じことばかりを頭の中でグルグルと回していた。

ずっと…それ以上なにもしてあげられない…

それからさらに10分くらい経っただろうか…二人とも泣き止んではいたが、まだそのまま立っていた。

さすがに寒くなってきた。

「ミュキ、とりあえずクルマに戻ろうよ。風邪引いちゃうよ。」

ボクはミュキに、やさしく声をかけた。

ミュキは振り向いて、クルマへと向かった。

そのとき、なぜか決意したかのような、ミュキのオーラみたいなのを感じた。

ボクはちょっと不安を感じたが、また泣かせても嫌だし、さらにこの寒空の中でたたせるわけにも行かない。

ミュキとボクは、クルマに乗り込んだ。

「ちょっと、そこらへんを流す？」

ボクはミュキに訊いた。

「うん、いいよ。」

ミュキは落ち着いた声で答えてくれた。

ボクはクルマを発進させ、きれいな夜景が映る川を右手に見ながら、淡々とした運転を始めた。

少し経ったところでミュキが口を開いた。

「ねえ、私さっきずっと考えてたんだけど…やっぱり一度友達に戻ろうよ。思いついたことがあって…」

やっぱり別れるのか…

周りの話を聞くと、一度お互いの距離を置くと、大体は本格的に別れるみたいで…

離れるの嫌だよ…でも、それが声にできない…

なぜなら、ボクもさっきからずっと考えていたことがあって、そこで気づいたことがあったから。

『なんで美優がミュキだと気づかなかったんだらう？』と。

ミュキに対して、心の中で負い目があることに気づいたのだ。

考えた際に大分冷静さを取り戻したみたいで、今はもっとミュキの話を聞いてないといけないと思った。

「私、ホントにカスガと付合っていきたい。そしてカスガのお嫁さんになりたい…」

…とてもうれしい言葉…でも…

「でもカスガ…『美優』が気になってるんだよね？カスガやさしいから…」

…そう、たとえ美優がミュキと同一人物だと分かっているけど、なんだか割り切れてなくて…それでさっきのようなケンカになっちゃってたのだから…

「私、だからこういう風にしようかと思って、だからちゃんと聞いて？」

「うん、わかった。」

ボクはミュキの次の言葉を待った。

「私、しばらく『美優』でいることにする。でも私自身ホントは『ミュキ』…ホントはこれ以上違う名前で行きたくないの。だから、『ミュキとやりなおす』為には…カスガに『ミュキ』を迎えに来て欲しいの。」

なに？ミュキとやり直すには…ミュキを迎えに行く？

どういう意味だろう…

「迎えに行くって…場所は？いつ？」

「それは、カスガが考えてよ。いろいろ思い出してみよ。私、事故の前にカスガと付き合ってたときみたいに…こんな色んなこと考えたり、今のような複雑な関係のままで行きたくないの…。」

ミュキを迎えに…

事故の前…

…

事故の前のことで、やりなおす…

なんとなく分かるような気がするけど…今は即答できない…

ミュキとの思い出は、いろいろと思い出することができるけど、でもそれらをまとめて思考することができない。

「ねえ、今日はもう帰ろうよ。」

ミュキがそう言った…

ボクは結構な時間悩んでたのだろうか…

…って、今日ボクの誕生日だったんだよね…

ミュキは祝ってくれるはずが、ボクのせいでぶち壊してしまった。

「…うん」

ボクはクルマのエンジンを掛けて、美優のアパートへと車を走らせた。

その道中での車内は、ラジオの音声以外はほぼ無音という、静かなじかんが過ぎていっていた。

程無く美優のアパートに着いた。

「カスガ、ちょっと待ってて。」

ミュキはそういうと、自分の部屋に駆け込んで行った。

ボクはその間も考えていた。

…前の二人のときの頃のように戻る…

…いったいいつなんだろう…場所なんて全然思い浮かばない…。

そうこうしているうちに、ミュキが部屋からでてきた。

「カスガ…これ持ってて。」

ミュキは細長い小箱をボクに差し出した。

どこかで見たことがあるような…

「カスガ…きっとこの箱のこと思い出すと思う…だから、その時にあの場所で会おうよ。ね？」

ミュキは真剣な眼差しでボクに話しかけた。

「じゃ、カスガ、おやすみなさい。」

ミュキは『美優』になったのであろう…さっぱりっていう感じで部屋に戻っていった。

ボクは渡された小箱を開けてみた。

美優が部屋に入ったのを確認して。

…ボクはその中身を見て、はっと思いました。

きっとあの場所に違いない。

時間は…午後？午前？

ああ…思い出せない…。

あ、いや…この箱がヒントというのであれば、時間もあの時刻か…

よし！はっきりと分かった訳じゃ無いけど、なんとなく答えはわかった！

ボクはとにかく部屋に戻りたかった。

あのジャケットを引っ張り出しておこなきゃ…

ボクはクルマを自分の部屋に走らせた。

ミュキ…やり直そうな！

それから約半年後の3月。

その間までなにをしていたかというと、別に変わったことはしてない。

いつもの生活を送り、ふつうに学生をしていた。

あ、いや、卒論の作成で、ここ最近までは図書館に行ったり、学校に行ったりと、忙しくしていた。

ちょっと違うことといえば、美優と前よりも会わなくなったこと。

卒論や単位を獲得するために忙しかったのもあるのだが、あの日からちょっと…なんとなくたけど、心の中で美優との距離を置いてしまっていた。

美優も美優で、色んな作品を作って、ファッション雑誌やアパレル関係の会社に持込をしたりと、ファッションデザイナーへの道へと進んでいこうと頑張っていた。

お互いになにかと忙しくしてて、合う時間がなかなか合わなかったのもある。

そうこうしているうちに、もう3月だ。

そうそう、バレンタインデーは、ふつうにデートして…手作りのチョコレートももらったっけ。

その時は美優と楽しい時間は過ごせた。

しかしそれ以降は、ボクよりも美優のほうが忙しくしており、メールではやり取りしてはいたが、それっきり美優とはあっていない。

そして今日…たぶん…ミュキに逢えるはず。

つい今、出かけるための準備をしているところである。

戸締りOK。

ガスも…よし、元栓締まってるぞ。

服装も…よし、ミュキが前に作ってくれたジャケット…これを着ていって決めていた。

そして大事なアイテム、あの小箱も…

いや、箱は持っていかないでおこう。

ボクは小箱から中に入っている物を出して、ジャケットのポケットにしまった。

そしてボクは家を出た。

ボクの考えた答えが間違っていなければ、きっとそこで待っているはず。

いつもクルマを置いてある駐車場へ。

そうそう、クルマはなんとか復活した。

親から譲ってもらった、あのクルマになっている。

たぶん…ミュキはそこまで求めてはいないだろうけど、ボク的にクルマも同じようにしたかった。

エンジンがダメになっていたこのクルマ、なんとか安くしてもらって直したのはいいが、これがなかなかの出費だった。

現金なんてとても出せるわけも無く、ローンを組んだ。

地味にそのローンが、ボクの生活を逼迫させてはいたが、これも自分を戒めるため…と、自分に言い聞かせていた。

たぶん4月からは、今までよりは少し裕福に暮らせるはずだし。

そうそう、一応就職は決まった。

これまでバイトさせてもらっていた出版社に、正式に社員として勤めることになった。

ファッション関係の部署で働けるかどうかはまだ分からないが、とにかく就職できただけでもよかった。

今日からは、体的にも心的にもリラックスできるはず。

…今日のことがうまく行ったらの話ではあるのだが。

ボクは、愛車を走らせた。

駅へと向かって。

実はまだ少し早いかなと思っていた。

なにせ僕の家から駅までは、クルマでほんの10分ぐらいの距離。

そう、駅へと向かっていた。

最後にミュキとあった場所。

そして、ミュキにプレゼントを渡した場所。

あの時渡された小箱の中には、ティファニーのネックレスが入っていたのだ。

ボクが2年前のホワイトデーに、ミュキにプレゼントしたものだ。

その証拠に、ネックレスのチェーンの両端に、「miyuki」と「kasuga」の刻印が入っている。

チェーンをつなげると、二人の名前が並んで、非常にラブラブな印象を与えるネックレスになるのだ。

ボクがこれを忘れるはずは無い。

なけなしのお金をかけたというのもあるが、どうせならとネームをタイプまでしたのだ。

だから今日は自信があった。

必ずミュキは駅に来ているはず。

ボクはそう信じて疑わなかった。

…ミュキが意識を失う前に、僕と最後に逢った場所だったから。

『その場所、時間からやり直そう』…ということである。

そして、駅に着いた。

ミュキは？ミュキはどこだ？

…

とりあえず駅の外にはいないみたいだ。

ボクは、ポケットの中のネックレスを握り締めて、駅に入った。

そしてエントランスをキョロキョロと周りを見渡した。

…

…ミュキがいない。

券売機の前にも、キオスクの前にも、よく待ち合わせ場所に使われる喫茶店前にもいない。

どこだ！？ミュキ…もしかして間違えてたのか？

…いや、そんなはずは無い…

ここがミュキと逢った最後の場所。

ボクは駅の中をあちこちと歩いてミュキの姿を探したが、やはりいない。

そうこうしているうちに、時間が迫っている。

どうしよう…ミュキの携帯に電話入れようか？

…いや、ダメだ。

それなら、こんな約束の意味が無い。

電話なんて掛けたら、ミュキにフラれるどころか、もう顔すら合わすことが出来なるだろう。

ボクは必至で駅の中を探し回った。

躊躇しつつも、女子トイレまで覗いた。

いない！いない！

ミュキがいない！

そうこうしているうちに、駅にある掛け時計が、とっくに約束時間を過ぎているのを示していた。

ボクは逢ったら手渡しで渡そうと思っていたネックレスを、ポケットから出して少し眺めながら考えていた。

違ったのか…ここじゃないのか？

ボクは既にポケットから出した右手に持っているネックレスを、ぎゅっと握んだ。

しばらく駅の構内で突っ立っていたが、気づいたら1時間近くも経っていたらしい。

ボクは目に涙を溜めながら、うなだれた状態でクルマに戻ることにした。

駅から外に出て、僕の車のほうを見ると…

…

クルマのところに誰か立っている！

…

ミュキ…ミュキだ！

…ミュキ…見た目まで少し、当時のミュキっぽくなっている…。

いや、太った…とか、ほぼすっぴんになった…とかじゃなくて、当時と同じような服装になっている。

ボクは思わず駆け出した。

「ミュキ…よかった…ここで合ってたんだね！？」

するとミュキは、

「ブブー！残念でした～クルマのすぐ外が正解でした～！さっきカスガが駅に入っちゃったの見てたんだよ！」

ミュキはニコニコしながら言った。

ちくしょう…ミュキめ…ミュキめ…

「ミュキ！」

ボクは思わずミュキを抱きしめた。

周りには沢山の人が歩いていたが、ボクはかまわずミュキを抱きしめた。

ミュキの両手が、ボクの背中をやさしく包むように抱きしめた。

「やっと…やっと会えたね…カスガ…もう離れないでね…離さないでね…」

ミュキはボクの胸の中に顔をうずめて、泣き声でそう言った。

ボク達は、白昼なのにも関わらず、周りの視線も気にせずに抱きしめあっていた。

そのボクの右手の中にあるネックレスは、太陽の光を受けて、キラッと輝いていた。

それは、今日ボク達二人を祝福しているように感じた。

そして二人は唇を重ねた。